

「一體雜穀八を潰したのは誰です」

「他人さんは何と云ふか知らんが、雜穀八を潰したんは、鶴さんお前さんぢや」

「叔父さん冗談を、弄らないで」

「イヤ、冗談でも弄りもしやせん、お前さんが潰してやつたんや」

「そら眞劍に仰しやるのですか、それは」

「そうぢや」

「カア、プアー」

「コレ、疊の上へ土足で上つて如何するねん、コレ唾を吐いたりして」

「唾ぢやねえや、咳だよ、やいモウ一度云つてみる、十年前に東京へ行つて今歸へつたばかりの  
 こちとらが何うして雜穀八の家を潰せるんでへ、榭屋新兵衛、てめへ耄碌しやあがつたな、老耄  
 奴」

「アハ、、、」

「何がお可笑いんでへ」

「コレ表へ立つな喧嘩やない、少し聲の大きい話を仕てるのぢや、入口の障子を閉めときなされ戸口  
 へ人が立つ、コレ鶴さん、大きな聲を出しなさんな、御近所へみつともない」

「大きな聲は地聲だい」

「マア落ち付きなされ、お前さんが潰したと云ふ因縁を説いて聞かしてあげよう、お前さんは昔から  
 此の町内の褒められ者ぢや、若い者に似合はん堅人ぢや、放蕩もせず宜う働く感心な者やと、誰一  
 人お前の事を悪う云ふもんが無かつた」

「おだてるねえ、忝茶瓶」

「イヤおだてはせん、本當の話を仕てるのぢや、町内に極道息子があると、鶴さんを見習へとお前さ  
 んを手本に仕て意見をするぐらいぢや、その間にお前さんが淨瑠璃の稽古屋入り、ア、悪い處へ這  
 入つたなア、あれが機會で悪い友達でも出来て極道をせねばえゝがなア、と思ふたが仲々身を崩さ  
 ず相變らず商賣を一生懸命にやりなさる、浮いた話も聞いた事がない、處が今でもお前さんはえゝ  
 男や、まして十年前は仲々の美男子、町内の娘がお前さんにヤイ〜云ふ、雜穀八のお糸さん、毎  
 日縫物屋の往き歸りにお前さん處の前を通つて、お前さんの顔を見て赫い顔を仕てる、宅で婆さん  
 と話を仕てたんや、蔭裏の豆も罅ける時には罅ける、お糸さんもうやら鶴さんに氣が有るらしい  
 なアと、處が或る日、町内の參會が有つて、他の人と別れて此の町内へ歸るのは八兵衛はんと私と  
 二人連れ、道での話に、時に榭屋さん、宅の娘のお糸に誰ぞえゝ養子が有りましたらお世話願ひま  
 すとの話、私が眼鏡屋の弟息子鶴さんとはと、お前さんの事を云ふたんぢや、すると、あの眼鏡屋の